

聞いてほしい。

# 素っぴんのアタシ。素顔のサウンド。

オープンマインドになりたいときは、自然なサウンドがふさわしいと思う。  
だから、ときどきアタシもアコースティック・ギターを弾く。  
飾りを捨てて、ナチュラルな気持ちを大切にしていきたい。



## PRINCESS KAORI



MORRIS GUITAR BOOK モーリス・ギター・ブックス

☆、モーリスギターを扱うミュージックショップが全国にある。詳しい店舗情報は、ウェブサイト、パンフレット、カタログを参照してください。

株式会社モリタ楽器 / 東京・大阪・名古屋・福岡 / 本社 〒101 東京都千代田区若本町2-7-4 ☎03(662)5041

# GB GUITAR BOOK

サウンドが聞こえてくる音楽情報誌  
1989. APRIL  
550 YEN

●巻頭特集●  
**PRINCESS PRINCESS**  
"PANIC TOUR(WINTER)"  
——感動の武道館3DAYS

●トップ●  
BUCK-TICK  
大江千里  
永井真理子  
PINK  
大沢誉志幸  
木崎浩史  
松下里美  
B'z  
中村あゆみ  
江口洋介  
OFF COURSE  
THE HEART  
PERSONZ  
THE PEPPER BOYS  
松岡英明  
浜田省吾  
佐木伸誘  
ZOKKON / JANE  
ハービー・ボーイズ  
レッド・ウォリアーズ  
UP-BEAT  
フレンズ・オブ・ステイション

●トップ●  
BUCK-TICK  
大江千里  
永井真理子  
PINK  
大沢誉志幸  
木崎浩史  
松下里美  
B'z  
中村あゆみ  
江口洋介  
OFF COURSE  
THE HEART  
PERSONZ  
THE PEPPER BOYS  
松岡英明  
浜田省吾  
佐木伸誘  
ZOKKON / JANE  
ハービー・ボーイズ  
レッド・ウォリアーズ  
UP-BEAT  
フレンズ・オブ・ステイション

COVER ARTIST



●特集●  
久保田利伸  
"I NEED YOUR FUNKY THANG"  
TOURスタート!!  
**THE ALFEE**  
ニュー・アルバム、レコーディング!!  
**米米クラブ**  
激白!! 8人の言い分  
**TM NETWORK**  
"CAROL" TOUR in 札幌  
新曲収録シングル・ホスタ  
**米米クラブ UP-BEAT**  
●新曲収録SONG BOOK●  
ニュー・アルバム全曲集  
レビッシュ『ANIMAL II』  
メモリアル・ヒット選集  
**OFF COURSE**  
etc.

# PRINCESS PRINCESS

# PRINCESS PRINCESS

BIRTHDAY CALENDAR



## 3 MARCH

- 1 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 2 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 3 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 4 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 5 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 6 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 7 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 8 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 9 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 10 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 11 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 12 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 13 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 14 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 15 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 16 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年

- 17 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 18 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 19 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 20 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 21 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 22 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 23 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 24 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 25 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 26 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 27 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 28 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 29 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 30 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年
- 31 日 ●小島新太郎 '62年 ●小松原伸 '62年

# PRINCESS PRINCESS PRINCESS<sup>2</sup> PANIC TOUR (winter)



1月23日、24日、25日。武道館3daysのステージは、プリンセス・プリンセスの5人にとって、とても想いの深いコンサートだった。次なる活躍への大きなステップをも予感させながら……。

撮影 ● 佐川浩郎 文章 ● 佐野洋子

「この喜び、絶対、結婚式より上だろうね」と、奥唇香が言う。メンバー全員大きくうなずいた。

3日間の武道館コンサートを大成功のうちに終え、まだ茫然としている状態が続いているという。

「武道館でコンサートをやっていうことより、武道館で『成功した』ってことが嬉しいんだと思う」

肉眼では見えなかったけれど、ステージに立ったときの彼女たちの顔はいままで誰も見たことのないほど輝いていたに違いない。プリンセス・プリンセスは、女のバンドで初めて武道館を成功させたバンドになった。

この3人が同じ運命の元に出会って7年目のことである。

ツアーのサブ・タイトルであり、アルバム・タイトルでもある「LET'S GET CRAZY」そのものを狂いつけて目の丸の下は擦れた。自分の常まで辿り着くまでに、私は何人の興奮したお客さんに「スマイセン、ゴメンナサイ」を言わなければならなかっただろう。1曲目の「GET CRAZY」から、香原はまさに興奮のルツボと化していた。見慣れたはずのこの会場がいつもよりひどく人間臭い空間に思えた。そして、

ステージの彼女たちが全身からエネルギーを発光させているように見えた。彼女たちは、この1万人収容のデッキイ空間で全く小さく見えなかった。

カオリ「3日間、ホルーンが全然下がらなかったんだよね。いつも2日目に調子悪くなっちゃうりするんだけどさ。そのシンクスを破った」

アッコ「天井の近くまでいるお客さんをこの目で見たときはゾクッとするものがありましたね。あー、これ経験しちゃうたらもう止められないと思った」

トモコ「あの人も全員が私たちを見たいがためにここにいらんだってことがどうしても信じられなかった」

カオリ「そう、そう。それに、ステージから見ると客席が意外に近いんだよね。だけど、3階席の上のほうから見たらやっぱり広い」

アッコ「リハーサルするとき、香原をウロウロしているうちに緊張感が高まってきたもんな」

カオリ「あの3日間はやっぱり神経がすっごく尖っちゃった。だって私、武道館の4日前に喉の調子が悪くなって声が出なくなっちゃったのね。それまでなんともなかったのに突然、だよ。さすがにアセっちゃった。だけど、

武道館3日間は（声が）ちゃんと出たもんね。それだけ張りつめていたものがあったんだと思うよ」

トモコ「私たちが調子よかったぶん、スタッフがかぶっちゃったのかも。広島のカキが当たって4人も倒れたんだから」

カオリ「カキの怪奇現象、なんつって」

「WONDER CASTLE」「VIBRATION」と、景気のいいナンバーでビニビニ音飛びしてMC。24年の武道館史上、初めての女のバンドがここを制覇した記念に、1、2日目は万歳三喝、最終日は三本締めをしめやかに（でもないか？）と行なう。

「私たち、プリンセス・プリンセスの急な昇り坂のきっかけを作った曲です」と紹介されたその曲は、もちろん、「MY WILL」。

カオリ「2日目にタンバリンを落っことしちゃってね。アレって一回落としてちゃうとヘンに意識しちゃうってダメなの」

トモコ「私、あのとき気にしているのが分かった。気にしちゃうとが入って失敗するもんなんだよね」

アッコ「演奏もそうだね。間違っちゃ

うかなくて思った瞬間に間違っちゃったりする。武道館は緊張を通り越してたから、緊張を自覚していなかったのかも知れない」

カオリ「1日、2日は『明日があるぞ』っていうのが頭にあるけど、3日目は今日で終わりだと思つて逆に胸がドキドキしてきちゃったよね」

トモコ「ゴハンもノドを通らなかつたくらい。私たちはそれを『宗公現象』と呼んでいる（笑）」

カオリ「初めての世公のときに比べたら、『ヤッター』っていう実感はあるんですけどあった。『私はいま武道館に立っているんだ』と思うと、ライブを楽しまなきゃって感じになつたもの」

トモコ「もう終わっちゃったんだっていうのが信じられない。ライブって、ふっと気がつくって終わってるの」

カオリ「でも、やっぱりあそこ（武道館）でやったらもう止められないって気持ちがあった。本当に生きてよかったと、あのときと思ったことってないよ」

真っ赤なライトに映し出される5人のシルエット。ハードでヘビィな展開に客席がどよめく。夜の街の喧騒と孤独を歌った「STREET WOMAN」。

# PRINCESS PRINCESS PRINCESS<sup>2</sup> PANIC TOUR (winter)

「泣かない。だってカッコ悪いもん」



だ。間奏で、アッコちゃんのチョッパ一・ベースを皮切りに力が入ったソロを披露。プレイヤーとしても運達者しいところを見せつけてくれた。こういうハードな側面の成長ぶりは、去年から積極的に挑げてきたツアーの成果というべきだろう。私の後ろの席にいたバンド少女らしい女の子は、憧れの面持ちでメンバーの名前を叫び放した。

MCでは、各メンバーの書いた詞の作風をカオリちゃんが分析。それによると、失恋の歌を泣きながら書いてるキョウちゃん、二重人格のトモちゃん、見た目と同じく歌詞も断定的なカナちゃん、日本語の使い方がときどきへんなアッコちゃん、という結果に思い当たる。かくいうカオリちゃんも「企画モノ」を得意としているようだ。

MCの合間にも、あちこちから威勢の良い声援が送られて、オンパベリが中断される。カオリちゃんも変わった様子の言葉がいかにも彼女らしくかった。「そんでだ」

カオリ「そんでね、初日は声援があまりウルサイもんだから、「ウッセーノ話を聞け！」とか言ってる。アッコ「でも、お客さん、あったかかったよね。なんか肌で感じた」トモ「やっぱり、お客さんのパワーってスゴイよね、あれだけの人が見ていると、すごい「クル」もんね」カオリ「そう、そう。本当に3回くらいもう死ぬかもしれないという瞬間はありました。(笑)けっこう、ウチ、飛べますからさあ。「VIBRATION」あたりで1回死ぬの」アッコ「抑えるってことを知らない」カオリ「出し惜しみなんてできないよね。私たちが持っている力が100%とする、120%まで行けないと満足できないってふうにできてるタイプなのかもしれないね。70、80%でちゃんどできるのがプロフェッショナルなのかもしれないけど、そういうのってやった気が

しないんだよ、私たちって」トモ「頭は使っていないね。計算もしないし」カオリ「うん。もう本能のまま」

「SHE」ROMANCIN' BLUE」と、しっとりしたナンバーが続く。そして久しぶりに「GIRL'S NIGHT」が復活。ライブハウス時代から歌ってきた曲だけに、どうしてもこの流れ舞台に引っ張り出してあげたかったんだそうだ。「マンネリのカップルがしばらくぶりに会ったらやっぱりコイツしかないと思うような、気持ちになったとか。プリンセスらしいロックン・ロール「夕陽が呼んでいる」、「HEART STOMPIN' MUSIC」で点火され、「へっちゃら」で客席は爆発前。まさしく、このときの彼女たちこそ何が起きても「へっちゃら」だったんじゃないだろうか？

カナコ「あのとき、夢見たことがいま実現してるんだ、そう思うとトリ肌が立った。嬉みたいんだけど、これは現実なんだよって自分に言いきかせて」キョウ「前はね、武道館に出る人たちって、自分とは違う生活をしているのかと思ってるの。だけど、いまでもスーパーに買い物に行くし、電車でだっただけで帰るわけじゃない。なんだかすごく不思議な感じがする」カナコ「東屋の弁当も普通だったしな」キョウ「武道館でできるなんて思ってもみなかったのは、「もしも」の語に花が咲いたものです。歌に出てくる別れちゃった彼を呼んで、その曲のときにスポットを当ててやろうぜ、なんて冗談言ったりして。(笑)」

カオリちゃんがコップの水を顔にぶっかけた。ステージに輝きながら、「冗談じゃない」を歌う姿は氣迫に満ちていた。ラスト・ナンバーは「GO AWAY BOY」。天井近くの音が響きこちてきそうなほど、目の丸の下は濡れ

ていた。カオリ「3日やってよかったと思った。1日目ビックリして、2日目実感して、3日目はこっちからも返せないような気がするんだよね。悔いの残らないステージができたことが一番嬉しい」トモ「私たちが力がそこそこときに無理してやらないでよかったよね。いまだき、武道館なんて誰でもできるなんて言われるけど、実際そうなのかもしれないけど、私たちにとっては特別の感動があったってこと」カオリ「うん。武道館なんて大したことないよ、って言えちゃうのってツマンナイよね」

アンコールの「M」には意表を突かれた。3人揃ってステージの最前列に並び、ア・カベラを歌ったのだ。「一番好きな人のことを思ってるってください」と、カオリちゃんも言った。トモ「武道館でア・カベラ歌うなんて絶対無理だと思ってたわけ。なのに3日目ハッと気がついたら平然とやってる自分がいたのね」カオリ「ウチはけっこうコーラスに力入れてるから、ア・カベラには一度挑戦してみたかったの。まっとうできることに決まってると思ってる」アッコ「M」、「世界でいちばん熱い夏」ときて、もう気持ちがこのへんまで高まってたところで……」

「11」GROWING UP」で、来た、来たッ！」トモ「最終日、M」が終わって、カオリちゃんが「ありがとう」って言ったときから、これは来るなと思ったよ」カオリ「アッ、分かったか？」トモ「ウん。すごく分かった」

客電が点いて、「万人近い観客が視界いっぱい広がる。カオリちゃんが

マイクを客席に向けて。へきまがくれた 鞋をはいていた 有志によるコーラス隊の歌声が鳴り響く。マイクを戻して、ワン・コーラス目に泣きながら歌ったのは「涙は見せない強がり」のところからだ。カオリ「本当に泣きそうになっている自分がいて、しかも歌詞が「涙は見せない強がり」なわけじゃない？「19…」を歌いながら、いままでの8年間のことを全部思い出した。何度も何度も人のコンサートに足を運んで、あー、いつか私たちもここに立てたらなあと思いつけてきて、いまここにいるんだって」トモ「19…」って、私たちがひとつずつ階段を上っていくのをずっと見守ってくれた曲なんだよね」アッコ「へひとつずつ現実が変わって……」

カオリ「いままでの8年間にはイヤなヤツにも会ったし、思い出したくもない経験もして来たけど、そういうのが全部キャラになっちゃった、あの瞬間に、この瞬間のためにずっとやってきたんだって思った」カナコ「昔、8人で飲むとグチばっかりでたけど、今度からは笑いながら飲めるのが嬉しいよね。バアさんになって一生を振り返ったとき、アクシは武道館でヤツらだっと思って出すだろうな、まっとう」キョウ「金メダルももらったようなものだと思う。孫の代まで語り継がれるようなことをしたんだろうな(笑)」

3日間、最終日のコンサートの直後、兼業で5人だけになった、メンバーだけで噛み締めたい時間がどうしても欲しかったという。「あきらめないでよかったね、って皆で話したんだよね」「あの3分間は、ちょっと口では言えないものが……」「ウッ、ウッ、ウッ〜ン」と泣きまねをするその顔にサインが輝いていた。



1月23日、午後9時、3日間のライブを終えたその直後! 5分だけ、私たち5人がけいこで

# PRINCESS PRINCESS PRINCESS<sup>2</sup> PANIC TOUR (winter)



おいの、お美星の鼻を閉めた。4年間の想いから、へんに魅える。ハンド続けてよかったネ、誰かかその想いを声にした。